

# 矢作川流域圏懇談会「第3回海の地域部会」開催報告

## 1. 実施概要

### (1)実施概要

○実施日時：平成24年10月23日(火)  
15:00～17:00

○開催場所：  
西尾市役所2階 22B会議室

○参加者：23名（事務局含む）



会議風景（1）

### (2)内容

#### 【会議議事】

1. 副座長あいさつ
2. 出席者紹介
3. 今年度の部会活動報告
4. 話し合い

- (1) 全体会議に向けた活動のとりまとめ
- (2) 来年度の海部会の活動内容について



会議風景（2）

## 2. 主な会議内容

第3回海の地域部会では、これまでのWG等の活動報告を行った上で、残りのWGの進め方や次年度以降の活動方針、今後、山・川部会と調整したいこと等について意見交換を行った。

会議で話し合われた内容は以下のとおりである。

- 市民の海への関心を取り戻す取り組み（絆再生）に関連し、環境教育について現在、何が問題なのかを3ヶ年の活動として整理する。
- また、今後の具体的な活動として、どのような環境学習の場づくりが良いのかをいくつかの提案を元に活動方針を話し合っていく。
- 行政は、海岸管理等において何を目標しているのか、これから海地域が目指そうとしていることへの矛盾はないかなどについても意見を出しながら進めていく。
- ごみ・流木の問題で矢作川と関係する海浜での活動を、次年度以降、いつどこでどのような活動ができそうか事務局でたたき台を作成する。
- また、県の漂着物の対策協議会との連携の図り方を今後の方針として詰めていく。
- 栄養塩類の話は、様々な議論がありハードルが高いため勉強会で課題の共通認識を図る。
- 土砂収支の話もハードルが高い話で一旦棚上げしているが、議論は継続していく。
- 今後の資料への活用や海のことを良く知るために、各自の活動の中で自主的に収集している資料（写真など）を情報収集していく。
- 海部会から川部会への全国一の生産量を誇る一色うなぎを維持していくために、遡上する魚種の立場から矢作川を甦らせるということを念頭においた提案を行っていく。
- 海の勉強会では、水産試験場からも情報提供を頂く。

### 3. 議事概要 (・ ご意見、提案 ▶ 回答)

(1) 副座長あいさつ 名城大学大学院総合学術研究科特任教授 鈴木輝明

(2) 会議出席者について

新たなメンバーの追加があったため、参加者全員が改めて自己紹介を行った。

(3) 今年度の海部会活動報告

事務局より、海部会が進めている4つの課題について今年度の個別の取り組み状況について報告するとともに、参加された方々に感想を頂いた。

- ・ これまで東幡豆にあれば多くマテガイがいるということに参加して初めて知った。現地へ行って見るということはずごく勉強になる。(松井)
- ・ 東幡豆には島や干潟がある非常に良い場所であるということ、まだ多くの西尾市民が知らないと思う。知ってもらうために地元小学生を海へ連れてくる取り組みを森と緑の関係の助成金をもらい継続的に進めている。(石川)
  - ▶ 運営側としての問題はあったか？西尾市内でも特に少し海から離れた子ども達は皆参加したいと思うはずだが、学校行事として責任がもてるか、受け入れ側もそうした認識を持ってできるか等に問題はないか。(鈴木)
- ・ 学校を動かすのは非常に大変である。教育長の方針次第というところもある。(石川)
  - ▶ 環境教育については、今後どのようにしていくか、参加してもらうために何が問題になっているのか、学校との関係以外にもあるかないか等を3年間の活動の中でも少し整理をしておきたい。(鈴木)
- ・ 奈佐の浜プロジェクトは、三河湾から流れてきたものを確認することを1つの目的としているが、参加人数が増えると活動範囲と人数のバランスがとれず目的が十分に浸透しないという課題が見えた。もう一つの目的である交流については、愛知県漁連の漁民のもりづくり活動などで、今後、行政間の連携が出てくると感じた。(井上)
- ・ 海岸清掃で集めたゴミの種類や由来はある程度、事務局や3県1市がまとめているのか。(鈴木)
  - ▶ 奈佐の浜では、すぐ後ろの焼却場で処分するため木質系何トンというような整理であり、3県1市で整理はしていない。(井上)
- ・ どこから流れてきたものか分からないと対策検討につながらないのではないかと。(鈴木)
  - ▶ 発生元については、住所の書かれているライターを探すことや、環境省が発信機を付けたブイで調査をした結果が参考になる。(井上)
  - ▶ ゴミは、集めてもすぐに溜まる。発生元を絶つことが重要と考えている。(事務局)

#### (4) 意見交換

##### 1) 全体会議に向けた活動のとりまとめ

事務局より、海地域部会における3ヵ年の活動総括（中間報告）と、今年度予定している残り2回のワーキングと勉強会の予定について説明した。

##### 2) 本年度の活動内容、今後の活動方針等について

- ・ 次回のワーキングでやろうとしていることがよく分からない。（石川）
- ・ 例えば、今の観察会に具体的な問題があるかないか、なかなか進まない問題は何かなどを明確にしていかなければ、関係者を集めて議論することもできない。（鈴木）
- ・ もう1つの例としては、答志島の活動を三河湾内でもやろうとすれば、具体的にどこでどのようなやり方であれば良いのか。原案を誰が考えれば良いのかなどを事務局と相談することも1つの議題になりうる。（鈴木）
- ・ 干潟再生された場所もコンクリートで護岸整備されている状況を見ると、再生に向けて何が重要なのか海のことを知らない人も多いと感じた。（大矢）
  - 現状が干潟の沿岸域を整備し過ぎていることが何か問題がありはしないかという提案だと思う。親しみやすい護岸をつくるという段階護岸のブロックになる。再生というなら本当の意味の再生でないという意味がない。干潟についても同じで砂を入れれば干潟という感覚では困る。（鈴木）
- ・ 岩場や砂場にごみが寄る特性があり、護岸や堤防はそうした特性についても考慮した整備である必要がある。（石川）
- ・ 干潟の問題が一番大きな問題であるが、事業を市民も巻き込んだ形でフォローしていくためには、どのような議論をすればよいかという中から今の4項目が出てきたと理解している。次回のワーキングでは、単にハードのアクセス性だけでなく、どうすれば市民が海に再び目を向けてくれるかを考えることも大切だと考えたものである。（事務局）
  - それは、話し合う中身として適当か。
  - 海岸配置や漁港配置などの具体的な行政目標と関係しないのではないか。進めようとしたときに行政にとって問題はあるかないか、努力すればできるものなのか、できないものなのか。漁協にとっても、海岸を解放したいのはやまやまだが、全部解放したら困るなど課題は色々あるので、このように抽象論でなく焦点を絞って議論を進めて欲しい。（鈴木）
- ・ 博物館のような生き物を集めた展示場があれば、生徒も観察するようになるのではないかと。（長谷）
  - 春の大潮のときに市と漁協でタイアップして自然観察会をやることを市民にもPRし、一般の潮干狩り客も少し勉強して帰られるというようなフレキシブルな場づくりも1

つの提案だと思う。(鈴木)

- ・ 今の市役所の仕組みとしての海岸管理と、流域圏全体で豊かな海を実現するために干潟、浅場を再生し、ヨシ原を再生するということの矛盾があるか等、行政としての考えについても発言を期待している。(鈴木)
  - 経験上、ハードの意見なら出せるが、環境などのことだとなかなか意見が出せない。(河原)
- ・ 今の立場を理解できるが、少し壁を取り払っていかないと市民だけで言い合っても絵に描いた餅になりかねない。逆に、行政が動きやすい状況をどうやってつくっていったら良いかも重要なテーマになると思う。(鈴木)
- ・ 奈佐の浜について補足説明をすると、3県1市が手をつなぐスタートになったもので、奈佐の浜で清掃活動するという行動だけを目標と捉えているものではない。伊勢湾全体の問題から狭義の三河湾の問題を、漁民、行政みんなで考えて手を結ぶためのキーワードだと理解している。(事務局)
- ・ 三河湾でも、一色地域は寄る場所がないので港へ寄ってくるというような特徴もあるので調査して欲しい。(石川)
  - 推測できる状況を、港湾や県や市などにも聞きながら意見調整してどうすれば減らせるかという対策につながると考える(事務局)
- ・ ごみの海地域の問題は、小枝や葉などの有機系ごみが小型生物の捕食対象となり生態系の一部を形成することもあり、複雑な問題である。県の対策協議会の動きを見ながら、懇談会でどこまでを扱っていくかを、今後の3ヶ年の入り口で少し整理していく必要がある。(石田)
  - その整理は必要である。今日は不参加なので意見が聴けないが、県とも連携しようという話にはなっている。(事務局)
- ・ 奈佐の浜の件は3県1市の取り組みがスタートではなく、疲弊した山間部の地域再生をするために現地の状況を知り、その後流域全体の問題へ目を向けようという動きの延長に答志島が出てきた話である。NPOの活動としての3ヶ年準備期間があったからこそ上手くいった。来年は田原と答志島で予定している。(井上)
  - それらの動きについては、どのような考えで、どこをやるのか等を事務局で整理すると良い。(鈴木)
- ・ 佐久島にもすごく汚いところがある。奈佐の浜のような集まりやすい場所なのか聞いてみたい。(大矢)
- ・ 三河湾にゴミ収集船はないのか。名古屋港では活躍している。(長谷)
  - 各港には清掃船は何隻かある。ただ、それは港の中のごみを拾っているだけで、伊勢湾・三河湾という大きな海域でゴミを拾っている船は、我々の中部地方整備局が所有

している1隻あるだけ。(神谷)

### 3) 次年度の海部会の活動方針について

- ・ 今後の活動方針についてはいくつか提案が出たが、それらも踏まえて提案をお願いしたい。(鈴木)

#### [ごみ・流木関係について]

- ・ 奈佐の浜プロジェクトがすごく成功しているのので、それを三河湾版で例えば佐久島のごみの吹きだまりのところを対象としてやると子ども達が喜んで来ると思う。(大矢)
  - 佐久島という場所を特定するかは別として、田原の方でも計画があるということなので、三河の中で矢作川とごみ問題で関連する海浜でこういう活動をどうするかということを検討していくということで整理したい。(鈴木)
  - 事務局で来年度以降、いつどこでこういった活動ができそうかたたき台の案を作成すると良いと思う。(鈴木)
- ・ 家庭ごみや事業系ごみを流し、どこへ流れるかを調査したら良いのでは。(松井)
  - 法律上の問題や制約もあるかもしれない。一度、検討してみて難しいかどうか、どのような調査ができそうかを、先ほどの環境省の調査も参考に整理すると良い。(鈴木)

#### [海の豊かさに係わる栄養塩類について]

- ・ 海を豊かにするには、栄養が足りないという議論が必要ではないか。魚介類の餌として十分かどうかは上流と密接に関係してくるので、議題に入れて欲しい。(井上)
  - 豊かな海を実現するためには二つ、栄養が潤沢に流れ込む流域圏の管理の仕方と、それから海へ流れ込んだ栄養素が赤潮とか海の底に沈まないような生き物がそれらをためておくような場所、つまり干潟とか浅場とか藻場とかヨシ原をもっと積極的に確保すべきという論議がある。学者の中でもいろいろな論議があり、国土交通省の伊勢・三河湾の再生の委員会でも非常に大きな話題になっている。
  - これは、今の段階で海部会の中で論議するのは少しハードルが高い。まずは勉強会で課題の共通認識を持っていただくことを取っかかりにするのが良い。(鈴木)
- ・ 生物がいないと栄養塩の利用もないがその生物はどうかというと、底曳き調査で20年前と比較した結果、多少、生物が戻ってきている感じがある。(蒲原)
  - 今の話は今度の12月の勉強会に補足的にテーマを追加してもらおうと良い。(鈴木)
- ・ 勉強会では、航路・泊地、デッドゾーンの話も取りあげたい。(井上)
  - 航路・泊地を機能的に確保することが、三河湾の生態系に影響を与えていることにごとこで折り合いをつければ良いかという問題は、川におけるダムの利水、治水と河川生態系と同じ問題であり、そこを触れずに話ができない。(鈴木)

- ▶ ぜひ、整備局の方も参加していただき、活発に意見を出し合う中で何かしら妥協点が見つかる可能性や、場合によっては新しい技術の展開もあるかもしれないと思う。
- ▶ お互い耳の痛い話が当然あり、産みの苦しみであるとは思いますが、少なくともこのワーキングは耳の痛いことも覚悟の上で議論し合うという姿勢でやっていていただきたいと思う。(鈴木)

#### [土砂収支の問題]

- ・ 土砂収支の問題は、市民の活動でやるのは難しいということで棚上げになっているが、論議だけは進めていただきたい。伊勢湾再生・三河湾再生のためには、干潟、浅場を造成することが絶対必要だが、上流から砂を運搬するとなると費用の問題で止まってしまう。税負担とするか、受益者負担（治水受益者、漁業生産受益者）とするかなどの論議をしないと、この土砂収支の話はいつまでも解決しない。(鈴木)

#### [検討体制について]

- ・ 水産庁の全国的な事業に干潟や浅場、藻場の保全活動があるが、漁業者の方々の活動に一般の市民の方々が連携するということが全国的に見ても非常に少ない。海部会で作業するのに漁師の方々に積極的に発言していただかないことには絵に描いた餅みたいな話ばかりになると思うので、組合長が忙しければ青年部の方などに参加して頂きたい。(鈴木)
- ▶ 現状は、出てこない。三河湾再生の会議に漁業者が入っていないという問題が非常に大きい。(石川)

#### [情報提供などに関する意見]

- ・ 漁協婦人部が連携して海岸清掃を年に3回ぐらい実施している。ビニールを食べて死んでしまうスナメリ、上流からくる流木やごみなどの現状など、議論をする前に海のことをよく知っていただきたい。(鈴木)
- ▶ 新しい調査も重要であるが、自主的に収集されている資料もあるようなので、それらをもっと資料に活用できると良い。(鈴木)

#### [海部会から川部会への具体的な提案]

- ・ 今、シラスの遡上が激減している。ウナギと関連して川の環境や海の環境、どういうことが問題なのかを一色うなぎ漁協の組合長に少し発言していただきたい。(鈴木)
- ▶ ウナギが生息する環境が河川に非常に乏しいというのが大きな課題である。ヨシ原などにウナギが生息し、カニやエビ、ミミズなどを食べているようなので、コンクリート護岸ではなく、もう少し自然の環境を取り戻し、河川環境を良くしていただきたい。(大岡)
- ・ これまで、遡上する魚種の立場からの海部会から川部会への具体的な提案や投げかけはなかったと思う。全国一の生産量を誇る一色うなぎを維持していくために矢作川を甦らせるということを念頭においた提案も非常に重要である。(鈴木)

以上